

馬町空襲の史実、後世に

子どもの頃に戦争を体験した京都市東山区の男性が、京都で初めて同区馬町地域であった空襲の史実を伝えようと、被害を示す「遺産」や体験談を集める活動を始めた。空襲から67年を迎える16日に「馬町爆撃を語ろう会」の開催を企画し、準備を進める中で、爆風による亀裂が残る板戸が地域の民家に現存することも分かった。「われわれの世代には語り継ぐ責任がある」と、取り組みへの協力を呼び掛けている。

馬町地域がある修道学区 昨年3月に学校統合で閉校した元東山小には、馬町 酒谷さんは「戦後に馬町時は東大路通の馬町交差点 空襲の爆弾の破片が残って、を離れた人にも呼び掛け、被書の跡をとどめる物証の南約400以上の七条通近 いる。破片を学校に寄贈し

16日に「語ろう会」企画

くに住んでいた。1945 年1月16日深夜、B29の飛行機が訪ねると、爆風で亀裂が入った板戸が保管されていた。酒谷さんは「戦後に馬町時は東大路通の馬町交差点 空襲の爆弾の破片が残って、を離れた人にも呼び掛け、被書の跡をとどめる物証の南約400以上の七条通近 いる。破片を学校に寄贈し

が響いた。現場一帯は翌朝 すでに、軍や警察に封鎖さ

た。当時の国民学校の児童だった自分も高輪になった。体験談を語る人がそのうち本当にいなくなる。危機感を抱き、昨年11月、修道自治連台会に「地域の歴史を風化させたくない」と相談した。

馬町空襲 1945年1月16日午後11時20分ごろ、B29が京都市東山区の馬町地域に爆弾を投下した。府の記録では死者34人、負傷者56人、全焼・全壊31戸、半壊112戸。修道国民学校(現在の元東山小)などが大きな被害を受けた。資料や現存する物証が少ないが、市民団体の調査で「高性能爆弾20発を投下した」とする米軍資料が見つかった。

石田さん方は爆撃地から北約80mにあり、板戸は緑色の廊下の扉だった。ガラスは粉々になり、鋭利な破片が庭まで飛んで来た。石田さんは馬町空襲について「命がなくなるのを覚悟した」と、母の富久子

さん(93)から聞かされていたという。

「語ろう会」は午後7時半から、爆撃で被害にあった場所立つ元東山小(渋谷通東大路東入ル)で開く。住民が体験を話すほか、堺市の大学生が「京都の戦争」をテーマに制作したDVDも上映する。参加は当日受け付けて先着約70人。無料。酒谷さんは「戦後に馬町



空襲の爆風で大きな亀裂が入った石田さん方の板戸。長く物置に保管していたが、「馬町爆撃を語ろう会」で公開する(京都市東山区)